世界臨床検査通信シリーズ-70

WADAについて-3
～東京2020大会でのドーピング検査～

文京学院大学名誉教授　芝紀代子
（株）LSIメディエンスADL・運営推進室　室長　彦田智久

2021年、東京オリンピック・パラリンピック競技大会（東京2020大会）が開催された。新型コロナウイルスの流行により、開催の1年延期、無観客という、これまでに経験のない状況下での開催であったが、これまでの大会と同様に選手達の活躍は感動を与えるものであった。

オリンピックでドーピング検査が導入されたのは1968年からなので、1964年に東京で開催された第18回オリンピック競技大会では、ドーピング検査は実施されていない。日本で開催されるオリンピック・パラリンピックで初めてドーピング検査が行われたのが1998年の長野冬季競技大会である。そして東京2020大会が2度目となるドーピング検査であるが、東京2020大会ドーピング検査の想定検査数は長野冬季オリンピックの約8倍である。

東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会は国内ドーピング分析員の確保とその運営を束ねてくれる組織を探していたが、全く見つからないまま、2018年10月が過ぎた。2020年に開催する日まで2年を切った10月末、日本アンチ・ドーピング機構会長から突然電話があり、東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会副会長と相談した結果、芝にドーピング分析員の確保を任せたいといわれた。どのように運営していくか一人で2週間ほどじっくり考えた末にお引き受けすることにした。

東京2020大会におけるドーピング検査は約6,500検体、期間中昼夜3交代で、結果を24時間以内に報告提出する。そのためには約100人近い国内分析要員を集めることが最初の仕事である。私が約50年にわたって心血を注いだのは臨床検査教育である。そこで、臨床検査学科の学生を動員して組織化することを決心した。

芝一人では荷が重いので千葉科学大学三村邦裕教授に片腕になってもらうようにお願いした。芝、三村先生は大会運営局アドバイサーの肩書をもらい、株式会社LSIメディエンスからは彦田そして組織委員会から2人の担当者に参画してもらい組織化をどう進めていくかの話し合いを何度も行った。

7大学が積極的に参加してくれ、さらに各大学で募集をしてもらったところ約258人の学生が希望してくれることがわかった。各大学との連携を密にするために責任者会議を開催し、参加学生の研修、シニアアシスタント制度を作るなど、順調に進行した。

しかしながら、教育実施の最中、新型コロナウイルスの影響による大会延期に伴い、残念ながら東京医科歯科大学と東京工科大学は学生を派遣することが出来なくなったが、幸いにも国際医療福祉大学、埼玉県立大学、女子栄養大学、大東文化大学、千葉科学大学の5大学は延期後の大会でも協力出来ることとなり、約140名の教員、学生を確保することができた。

ドーピング検体分析に携わるためには、しっかりとした技術習得が不可欠である。学生にはまず基礎教育としてピペット操作のテストを行い、学生の適性を判断した。また、業務に携わるには検体の取り扱いが出来るだけでは十分ではなく、WADAの規定等を理解し遵守するための教育も行った。参加学生は学業と両立させる必要があるので研修時間も限られているが、休日を使って研修に参加してくれた。

ドーピング検体分析の手法は多岐にわたるので、東京2020大会では、使用する分析機器の種類ごとにユニット体制を敷いた。学生を適性に応じたユニットに配属し、主として分析検体の前処理に従事してもらうことにした。また、大会本番前には実際の検体の流れや運用手順を確かめるためにストレステストを行い、大会本番に備えた。

大会本番では24時間体制で分析業務を行なう必要があるので、学生を日勤、夕勤、夜勤の3シフトに振り分け、いつ検体がラボに来ても対応出来るようになった。

工夫した点はシニアアシスタントというポジションを作り、教員の方々を分析要員として、学生の指導にあたってもらったことである。シニアアシスタントの方には学生への前処理検体の配分をしてもらったり、作業状況を把握して必要があればフォローしてもらい、分析業務が滞ることなく円滑に進むことができた。

ラボへの検体搬入スケジュールが当初の計画より大きくずれるなど、想定外のこともあったが、大きな問題もなく無事に東京2020大会でのドーピング検体分析は終了させることが出来た。その準備は非常に大変な道のりであったが、東京2020大会のドーピング検査に臨床検査学科の学生が携わったのは世界でも初めてであったこと、しかもWADAからは高い評価をいただきましたことは本当にうれしいことである。